

[36]

氏名	丁世絃
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第28号
学位授与の日付	平成29年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	近代韓国における儒教の展開—経学院を中心として—
論文審査委員	主査教授 吾妻 重二 副査教授 藤田 高夫 副査教授 篠原 啓方

論文内容の要旨

丁世絃氏の論文「近代韓国における儒教の展開—経学院を中心として—」は、いわゆる植民地期の韓国において伝統儒教がどのように変容、展開したのかを、成均館の後身として朝鮮総督府が設置した経学院を中心に考察した文化交渉学的研究である。

内容構成は以下のとおりである。

序論

第一章 成均館の廃止と経学院の設立

第一節 大韓帝国期の成均館から植民地期の経学院

第二章 日本植民地期における韓国の儒教儀礼

第一節 経学院の積奠祭

第二節 儒教儀礼の変化——「儀礼準則」を中心に

第三章 儒教講演会

第一節 経学院の講演会

第二節 斯文会の講演会

第四章 近代儒教と経学院——儒教の宗教化をめぐって

第一節 大韓帝国期における儒教の宗教的認識

第二節 日本植民地期の韓国における孔教運動

第三節 日本植民地期の経学院における儒教と宗教

第五章 儒教教育

第一節 経学院の付設教育機関——明倫学院

第二節 日本植民地期の漢文教育——第2次朝鮮教育令期の漢文教科書を中心に

結論

参考文献

第一章「成均館の廃止と経学院の設立」では成均館の廃止と経学院の設立が論じられる。国家最高の教育機関であった朝鮮王朝の成均館は科挙制の廃止によってその意味を失い、近代的学問機関としての改革を目指したが、結局成功せず廃止された。そして1911年、その教育機能を停止し、社会教化機関として朝鮮総督府によって設立されたのが経学院であった。経学院は成均館の積奠を継承して朝鮮王朝の伝統を受け継ぐ一方、講演会を経学院のほか地方の郷校でも開き、朝鮮総督府の儒教政策と社会教化に奉仕する役割を果たしたという。

第二章「日本植民地期における韓国の儒教儀礼」では近代における儒教儀礼の変遷とその機能について考察がなされる。経学院の積奠は成均館のそれを継承したが、積奠それ自体より、積奠を通じた儒教教化の方を重視した朝鮮総督府は、積奠儀礼を簡略化するとともに積奠に集まった人々を講演会に参加させ、朝鮮総督府の新政趣旨の説明と儒教教化を行なったという。

「儀礼準則」は王朝時代の儒教儀礼（婚礼、喪礼、祭礼）の簡素化を目指して制定されたもので、1934年、朝鮮総督府は制定と同時にこれを発行し、煩雑な儀礼の問題を解決しようとした。しかしここには1930年以後の経済的困難という背景と韓国伝統の冠婚葬祭の断絶という面も存在する。一方、地域には担当者として教化主事を配置し、地方の婚礼や葬儀を監督させた。すなわち、この準則は伝統的儒教儀礼の近代的変容を物語る一事例になっているとする。

第三章「儒教講演会」では、経学院および日本の斯文会における儒教講演会がとりあげられる。経学院の講演会は1910年代の経学講演・普通講演から徐々に変化を見せ、1930年代になると経学よりは戦争や満洲の状況、儒林としての自覚、戦争に対する婦人の心得などの時局講演に変わっていき、経学関連の講演は次第に消えてしまったことが明らかにされる。

一方、経学院は1910年代から日本の斯文会と交流を行っており、1920年代、相互に積奠に参加し講演を行なった。その中でも注目されるのは東京で開かれた「孔子二千四百年追遠記念祭」（1922年10月）と「湯島聖堂復興記念儒道大会」（1935年4月）である。前者の1922年の記念祭は斯文会が孔子祭典会を合併し、積奠の伝統の発揚、儒教・漢学研究、講演、雑誌の発行を行なう日本儒教を代表する機関になったことを植民地の韓国・台湾に誇示する機会になったという。儒教の命運を担っているのは日本であるということも講演では強調されたと指摘する。

後者の1935年の儒道大会は関東大震災で焼失した湯島聖堂の復興を記念する大会で、そこには植民地韓国や台湾だけでなく、中国の儒者、孔子の子孫、顔子の子孫も参加した。この会議では中国の儒教は衰退し、日本が儒教の伝統を継承しているという趣旨の講演が行なわれた。また韓国・台湾・中国の参加者に対しては同種同文と儒教という共通の文化が強調されたという。

第四章「近代儒教と経学院—儒教の宗教化をめぐる—」では、経学院における儒教の宗教性に関する議論の変遷のほか、心田開発運動以降の政策となった敬神崇祖・信仰心の涵養による儒教宗教化の様相につき考察される。近代の孔子教運動は西洋に対する東洋の

文化・宗教を反省する中で展開したが、韓国で植民地初期に起こった孔子教運動と総督府主導の1930年代の孔子教運動はその目的が違うという。すなわち、前者は孔子教を通して儒教の復活と西洋に負けない東洋文化としての儒教の意味を探るものだったが、後者は国民の精神を統一するという目的があったと指摘する。

このような傾向は日中戦争以後いっそう強調され、経学院の職員や明倫学院生徒の朝鮮神宮参拝、明倫学院における愛国式、宮城遥拝、復活した焚香礼などの宗教的儀式が行なわれた。経学院は日常的参拝の空間になり、諸学校の生徒や教師、さらには韓国・日本・中国の官僚も経学院を訪問し掃除、参拝を行ない、「皇道儒教」としての側面を強める。こうして経学院は宗教的意味も持つ複合的教化機関に変貌したという。

第五章「儒教教育」では経学院の付設教育機関である明倫学院および漢文教育について検討される。1930年、儒教教育機能をもたない経学院はこれを復活させて明倫学院を設立したのだが、その目的は儒教に関する教授と人格の陶冶であり、1936年には儒学に関する講究と国民道徳の本義の闡明を目指すようになった。また、明倫学院は郷校の財産により運営され、生徒は学費を払う必要がなかった。その生徒は全国各地の儒林の子弟であり、卒業後、教化主事や学校の教師として活動した。また、かつて成均館が官僚養成機関であったように、明倫学院の卒業生には1945年以後官僚になった人が相当いる。李家原のように研究者になった人物、国会議員、著名な書道家、戦後の成均館の館長になった例もあることを確認している。

公教育における儒教教育は漢文教科のあり方からも見るができるという。漢文教科は朝鮮総督府の教科方針に沿って行なわれたが、時代によって方針も変わり、教科目としての地位も変化しつつあった。注目されるのは第2次朝鮮教育令期の漢文教科書であって、文化統治を始めた朝鮮総督府は漢文教科書の文章を韓国・日本の漢籍からも選定するようにした。当時韓国語で教える科目は朝鮮語と漢文しかなかったことや韓国の歴史と地理を朝鮮語及漢文の時間に教えたのは教科目上の漢文教科の地位を表わすという。また「吐」を加えるようになり、韓国式の漢文教育が行なわれたのも興味深いとされる。しかし1930年には日本語科目の一部として漢文教科書が発行され、韓国式の漢文教育から日本式の漢文教育に変えられてしまったと指摘する。

最後に、結論として、近代韓国の儒教の特徴を一言でいうと「儒教の一般化」だとする。両班に代表される韓国の上流階級が享有していた儒教文化は、身分制がなくなった日本植民地期にその貴族的姿を変えて一般化が試みられた。それは「内地」の状況と朝鮮総督府の指揮、またそれを忠実に伝えた経学院と儒林の協力および教育・教化活動によって誕生した「編集された儒教」であったが、しかし儒教道徳や儀礼のテキスト化、儒教の大衆化の面はそれまでにない革新的な性格をもつものとして評価できるとしている。

論文審査結果の要旨

丁世絃氏の論文は日本植民地時期、儒教がどのように展開したのかを経学院を中心にと

論じた力作であり、重要な知見を含んでいる。主な意義としては以下の三点があげられる。

第一に、経学院という組織について詳細な調査・研究を行なった点である。経学院についてはこれまで一定の研究蓄積があるが、その儀礼や教化政策、講演などについて詳細な調査・分析はなされていなかった。とりわけ積奠儀礼に関して成均館時代のそれと比較して式次第の変化と社会的意義を論じ、かつて朝廷と両班による閉じられた空間で行なわれていた積奠儀礼が一般にも開放されるようになったという指摘は、近代韓国における「儒教の一般化」を表わす一端として重要である。

第二に、明倫学院の研究がある。明倫学院は、経学院の付設学校として新たに設けられた学校である。従来、研究がほとんどないのにかんがみ、本論文ではその設立の経緯、運営とカリキュラム、教職員や評議員会の構成、皇民化政策との関係などを網羅的に論じ、貴重な成果となっている。また、同学院の卒業生について追跡調査を試み、戦後、政治家、学者、教育者など多くの人材がここから育っているのを明らかにした点も評価できる。

第三に、日本および中国との関係を視野に入れることで新たな知見を提示している点である。「儀礼準則」と日本の生活改善運動の比較、東京の斯文会との交流、中国の孔子教運動との関連、韓国と日本における漢文教科書の比較など、いずれも当時の韓国儒教を知るために不可欠の事項であり、本論文ではこれらのテーマについて相当程度、調査・分析がなされている。また、近代韓国における儒教の特色を「儒教の一般化」ととらえるのも、韓国の伝統や日本近代の儒教を視野に入れての指摘であり、いわば文化交渉学の視点による新たな事実の究明として重要な知見といえよう。

問題点としては、本論文は朝鮮総督府による儒教政策に焦点を当てており、韓国の儒教の実態に迫るには、これ以外に民間の儒林たちの動向や思想、あるいは京城帝国大学など他の諸機関・学校との関係も視野に入れる必要がある。漢文教科書の比較研究も興味深いテーマであるが、まだ緒についたばかりという状況であり、今後いっそうの考察が必要であろう。

ただし、このような問題点をもつとはいえ、本論文が明らかにした韓国近代期の儒教の展開とその実際の姿は今後、近代東アジア儒教研究の一つの手掛かりになるとともに、日本の植民地であった台湾や満州における儒教の様相と実態、さらに近代日本儒教の実体を検討する際に一つの材料になることが期待されよう。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。